

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第三十一卷「社会科学（一の一）」

世界の国家形態と地政学および日本の国体（憲法、天皇、主権者たる  
日本国民）と地政学（日本列島、日本海）、国体論

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第三十一巻を成し、岩崎の言語の著作のうち、世界の国家形態と日本の国体、および地政学に関する著作を収める。

目次

巻頭言

第一編 ○歳々十九歳

第二編 二十歳々二十九歳

二十代の憂国（天皇についての考え）

第一部 地名・ノスタルジー・人を慕う心

第二部 マルクス

第三部 小室直樹

第四部 私の思う「愛国心」や「愛郷心」について

（編集集中）

愛国精神と私

我が国家論

国体の本義 天皇国体の再確認

国家運営

天皇

国家の本体と仮体

帝国憲法と天皇機関説

日本の立憲君主制の現状とその是非

最新の天皇 象徴天皇制と「個人としての天皇」

第三章 日本国憲法

第一節 無国籍憲法

第二節 国旗及び国歌

第一章 故郷岡山と私

第一節 ふるさとの定義

第二節 岡山の特色

第二章 岡山弁

第一節 「きよーてー」と「けうとし」

第二節 岡山県民の口腔

第三章 岡山の巫女神道

第一節 近代社格制度

第二節 社家

第二編 故郷と日本

第一章 富士山と日本人

第一節 天皇と富士山

第二節 見立て文化

第三節 日本海

第四節 竹島

第四節 太平洋

第五節 河川

第三編 人間のふるさととしての母胎

- 第一章 胎児感覚
- 第一節 三木成夫の着眼点
- 第二節 内臓感覚
- 第二章 ノスタルジ
- 第一節 聖母マリアの母性愛
- 第二節 ヒュズン
- 第三節 日本の母
- 第三章 「日本」の定義
- 第一節 日本の国体 日本とは国会 三権元首は衆議院議長
- 第二節 日本の国境
- 第三節 日本の国民 日本とは国民
- 第四節 日本の民族
- 第五節 日本の言語 国語サピア
- 第六節 日本の天皇
- 第三編 三十歳〜三十九歳
- 第一部 一介の事務担当者が思うこと
  - ・ 皇太子殿下への書簡、新元号への対応
- 第二部 「令和」時代を控え、早速「令和一七〇年」、続いて「令和一六〇〇年」が登場
- 第三部 現皇統以外の勢力の裏話
  - ・ 出雲神道と創価学会
- 第四編 四十歳〜四十九歳
- 第五編 五十歳〜五十九歳
- 第六編 六十歳〜六十九歳
- 第七編 七十歳以降
- 第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの
- 第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

二十代の憂国（天皇についての考え）

二〇〇九年八月三十日 起筆、攔筆、公開

[http://ij-art-music.sakura.ne.jp/sblo\\_files/ij-art-music/image/090823c.jpg](http://ij-art-music.sakura.ne.jp/sblo_files/ij-art-music/image/090823c.jpg)

選挙に行ってきた。

ところで僕は、日本という国、天皇・皇室あるいは靖国・憲法などについて考えるとき、いつも承久の乱と、地元岡山の部落差別を思い出してしまう。

後鳥羽上皇が討幕を図ったとき、動揺する鎌倉武士に夫頼朝の恩寵を説いて上皇討伐に向かわせた北条政子でさえ、「もしあの神聖でいらっしやる上皇を目の前にして討てなかったら、討たずに帰って来なさい」と言った。天皇・上皇という存在は、そういうものなのだ。そして、このときの北条政子は、武家の棟梁の妻というよりは、ほとんど巫女的な説得力を持っていた。これは、同時に僕の中では、

明治天皇崩御に際しての乃木希典將軍夫妻の一件をも思い出させる。

いずれにせよ、武家政権誕生の最初の最初から、朝廷と武家政権は並立していながら、常に「本体」は朝廷、「仮体」は武家であったと僕は思う。武家は、一度権力の座に就くと、ことごとく貴族化した。

平家然り、源氏然り、足利政権然り、徳川幕府然り。ところが、武家政権がある程度貴族化すると、治安がよくなる。足利義政・義尚の時代は、川端康成も惚れたように、最高の文化人の生き方が実践された時代だった。江戸時代、黄表紙など最も優れた文化が生まれたときの將軍は、今でいう知的障害者だった。刀なんて使わない武士が国家元首なのだ。庶民がそれを歓迎した。江戸時代までは、それでよかった。今の自閉症やアスペルガーの子どものお母さん方や医者は、そういうことを知らないでしょう。「武士道」という言葉は、欧米文明に対抗しようとして明治時代に生まれた言葉であり、それまでは、武士には必ず公家的な血があった。いざというときには、必ず「本体」に戻る。鉄砲という当時の最新兵器を手にはしていないが、一六〇〇年を境に国民レベルで原始的な刀にまた持ち替えた、そうしたら刀も使わなくなった、などという精神性は、日本を除く他の先進国の歴史にはありません。

「武士道」とは、すなわち「公家道・貴族道」なのである。「武道」とは「文道」なのである。江戸末期の「公武合体」も、欧米列強の威力を目の前にして初めて日本人に芽生えた二元論的な問題意識だ

った。「神格的な人間性」とでも言うべきものが、天皇にはあったのだ。その意味では、天皇の神格性が完全に失われたら、日本という国、日本人男性の精神性は「死ぬ」と思っただけでまず間違いない。僕はそう思う。

大東亜戦争における日本の暴走は、天皇が神格化されたから起こったのではない。天皇を、西洋的自我を有した近代国家の長と見なし始めたから、起こったのだと僕は思っている。ただしそれは、後発帝国主義国としての運命だった。戦後は、GHQの傘にはまった天皇の人間宣言によって、天皇の神格的側面と人格的側面とが完全に分断された。日本がゲマインシャフトからゲゼルシャフトに移行した。そのために、戦前の天皇に対する我々日本人の姿勢が、キリスト教の神への姿勢と同じであったかのように映ることになった。これがいけなかった。戦前までの天皇と我々日本の男性との関係は、いわばキルケゴールの言った神と単独者の関係である。二度と悲惨な戦争をしないためにも、万世一系の天皇の神格的な人間性は、失われべきではないと思う。

日本はそもそも、欧米列強よりも早く自民族なりの国家観を確立した民族である。近代主権国家が誕生する十七世紀半ばのウェストフアールン条約よりも前の一六〇三年に、天下泰平の礎を築いたわけだ。江戸時代に天皇という存在は「死んで」いなかった。幕府が「仮体」であり続けたことがよかった。

僕の地元岡山を含む中国地方は、いまだに部落差別が多い地域であるが、どうして江戸開幕以来、低身分の者たちが京都よりも西へ偏ったかを考えるべきだ。江戸の身分制度に対して、京の天皇が、「ただそこにいらっしやる」というだけで精神的ガードとなったことの意味についてである。

しかし、それでも江戸時代の身分制度は無かったに等しいものであって、よくよく調べれば、僕の周辺にあった部落差別は、 $\infty$ 割が明治以降の県民が勝手に作ったものだ。表向きは規格外の超最低身分である「穢多・非人」は、神社の掃除や道の死体処理をやり、「なんだか汚いことをやってくれる神聖なヤツら」と思われることはあっても、明治以降のような差別の仕方は受けなかった。四民平等という足かせは、平等という言葉に釣られた羊頭狗肉の人間観だった。

ところで、僕が親の世代あるいはそれより少し上の団塊の世代を見ていて、最も違和感を覚えるのは、「若いうちにできることをやれ」とか「若いうちにしっかり働いて、老後に備えろ」とかいう言い方だ。あれだけ安保闘争で散々暴れておきながら、なぜ今になって急に「大自然の中でロハスな生活」などと言い出すのかと思う。むしろ、そのまま暴れ続けろ、動き続けろ、と思う。暴れている最中に、

「自分に老後がある」と思ってやってきたのだろうかと思議に思う。それと同時に、最近の同世代の周りの二十代の同性が、テレビなどで簡単に「老後に備えて・・・」と発言するのも、どうしてもよく分らないところがある。

「若いうちにできることを・・・」というのは、よほど今の社会に従順な（今の社会を変えたくない）人にしか生じない発想だと思う。僕は老後の旅行なんて最初から無いものだと思って生きているんだと、改めて気付いた。その代わり、三度の飯を抜いてでもあの哲学書が欲しいと思ったら、すぐに買う。髪を染めるとか、ピアスをするとか、そんな金と暇があつたら、哲学をやれ、と僕は思う。それで消費税を上げるな、年金を保証しろ、老後に楽をしたい、と言うのは、勝手なものである。ところが実は今、一番そういう生き方をしているのが、団塊の世代なんだよな。僕にはそれが一番気に入らない。バブルであろうが、それがはじけようが、ずっと「精神的安保闘争」をやっていてくれたら、信用できるのだけれどね。

学生生活と言っても、あれは一つの「社会」だし、大学を卒業して社会に出たら出たで、どうして急にトーンが落ちるのだろうかと思う。社会に出たら自由が無くなるなんてのはウソです。僕は積極的に支持する政党は一つもないのだが、とにかく「夢も希望も安心も」あまりいらぬので、国のあり方（国体）というものを、超党的な観点からもっと真剣に考えて下さい。

僕はどうも変わった人間だから、「老後にどこに旅行に行こうか」と考えるくらいなら、「海や山や桜でも見ながら死ぬとするか」と考えるタイプなので、逆に最近のテレビを見てみると、鬱になって落ち込んでしまう。消費税が上がるのが下がるのが、僕としてはどちらでもよいです。世の中色々なので、世襲する人はするだろうし、ニートはニートでいいのです。どちらも悪いとは思わない。皇族は皇族で、フリーターはフリーター。そういうことは、僕の中では、あまり重要な問題ではない気がする。それよりも、日本という国、日本という文化が長く続くようにしてくれ。先の終戦の日に、戦争の悲惨さと過去の美しくたくましい日本人の生き方を思いつつ、テレビで「老後のロハスな生活」などの文句を見たときは、涙が出そうになった。

僕の周りには、天皇・皇室について深く話せる人がいないから、どうしてもネット上で気の合う人と話すしかないのだが、これについてはもっと議論されるべきです。憲法・靖国神社については、色々な考え方があってもよいと僕は思うが、平和ボケはもはや強制的に是正されるべきだと思う。少し前まで男系がとぎれる恐れがあったことについては、何とも言い難い悲哀が自分の中にあつたことは否めず、宮家を復活してでも男系男子に天皇であつていただきたいという自分の思いに忠実であるべきか、などと悩んでいたけれども、同様の状況を本当に経験した代々和歌の家である京都の上冷泉家の

奮闘ぶりを見て、日本はまだ捨てたものではないと思つたものです。私自身は、いつまでも男系男子論者でありたいと思つけれど。もつとも、女系・女性天皇を今後認めるなら、それと同時に宮家の断絶の根拠が薄くなるから、むしろ、そちらの場合にこそ、宮家を復活させる議論が一緒に出てきてもよいはずだ。いずれにせよ、僕が最も敬意を表する歌人藤原定家を祖先に持つ男系の冷泉家はとだえたことになるけれども、それもまた「なるようになった」のだ。もつとも、皇室のあり方は、最後には皇室がお決めになることだと思つ。

田母神俊雄氏は、僕と違って核武装論者でありながら、「核兵器は今後二度と使われない兵器だ」と言っているが、僕もそう思う。僕の考えは、お馴染みの顔ぶれで言うなら、「作らず、持たず、持ち込もう」という三宅久之氏や石原都知事思想に近いと思つているが、ともかくにも、核戦争は決してやってはいけないことです。

パプアニューギニアには今でも、わずか数十人規模の部族が数百も点在しており、それぞれが独自の言語を持っている。それぞれの部族に「長」がいる。それと同じことを、一億人規模で続けている日本に誇りを持つべきである。この感覚というのは、実は消えつつあるのではないか。僕の天皇に対する尊崇の念は、そういう「原始的・ゲマインシャフト的なムラの長」としての天皇に対する敬意そのものだと、八月十五日に改めて確認した。

僕は、北朝鮮は論外として、最近の中国・韓国は好きになれないけれども、中国文化・朝鮮文化には、欧米文化に対するのと同じくらいに敬意を払っており、非常に優れた文化だと感じている。けれども、天皇や靖国や戦争を論じるのに、他国に媚びる必要はないと思つ。僕は、会う人の多くから、「上がり症」だと言われるのだが、なぜかこういうことには躊躇しないところがあつて、中国人だろうが朝鮮人だろうが、ストレートに話すようにしている。先日、中国人女性や韓国人と戦争の話をした。そうしたら、どうということはない。「いや、俺たちには俺たちの文化があるんだ」と言えば、反論もなく、ちゃんと議論になる。

本当に天皇陛下に敬意を払い、憂国の志を持つて靖国に参拝する人にとつては、自分の中では「公」だろうが「私」だろうが、重要ではない話です。「公私渾然一体の保守の心」です。「保守」とは「保ち、守る」ことであつて、右翼でも左翼でもない。僕は、色々な欧米の国歌を聴いていて、いつも近現代主権国家としての威厳と同時に、血なまぐさい臭いを感じる。まだ白村江の戦しか対外戦争を知らなかった頃の国風文学を歌詞に据えた「君が代」ほど、平和な国歌はないと思います。我々は、イギリスがインドに対してやったこと、オランダがインドネシアに対してやったことと全く同じことを、アジアに対してやったことは確かならなかったけれども、今は観念上は日本の親が子どもに対してそれをやっているというのが、僕の考えだ。子どもの脳を英語植民地化する前に、日本の情緒を教えるべ

きです。とにかくにも、消費税が増えるか減るか、そんなことはどうだつてよろしい。日本の文化と国体と子どもの心が崩れることのほうに心を痛めやすい若い男性がいるということを、両党首（総裁）とも分かっているように思う。

戦前・戦中に活躍した政治家や軍人には、今で言う発達障害・自閉症・アスペルガー症候群に該当する人が多かったであろうという僕の考えをしゃべったら、左右両方から批判を受けるだろうか。これはずっと以前から思っていたことだが、ある本で本当に、石原莞爾はアスペルガー症候群だったとする記述を目にして驚いたものだった。その著者の目が正しいかどうかは知らない。しかし僕は、自分がそうなので、石原莞爾など戦前の軍人の目付き・言動を見ていて、ほぼ間違いないということが肌で分かるわけだが、逆に、脳科学者や心理学者は、自分自身がそうではないので、科学に乗せてロゴスで説明しようとするわけである。

北一輝・大川周明・東条英機・板垣征四郎・甘粕正彦・三島由紀夫など、僕の青春期の鬱屈した悩みの中で出会ってきた偉人たちの世界観は、ああ、俺に似ているなと思わせるところが多々あった。それは安易な戦争肯定論者や国粋主義者として思うのではなく、男に男が惚れる、あの感覚であろうと思う。そういう眼光・風格・教養が今の自民党や民主党のトップに備わっているかどうか。西洋で騎士道やダンディズムとして現れる男性性というものは、日本と東洋

においては性質が違います。我々日本人男性の、天皇と日本文化に対する尊崇の念は、多分にアスペルガー症候群的であつたと僕は思うわけです。そして、そのアスペルガー症候群的な天皇観を、他の民族の男性が決して持ち得ない原始ゲマインシャフト的な感情として肯定するというのが、僕の天皇観の特徴かもしれない。

実はアメリカは、日本のそういうところを、今でも恐れているはずだ。それを分かっているアメリカは、日本には核武装させたくないであろうし、一方で、それを分かっている中国・韓国は、日本のことが怖くなくなつてしまった。アメリカ大統領の、天皇陛下に対する最高敬礼を見るたびに、まだ日本は捨てたものではないと、何とか思っている。けれども、物質的には成功しながら文化的・精神的には最低の退廃を喫したこの国が、今後どうなっていくかと思うと、どうにも涙が出る。

### 第一部 地名・ノスタルジー・人を慕う心

二〇一〇年十二月十二日 起筆、攔筆、公開





僕が思想的に影響を受けた歌人の塚本邦雄は、義兄に手紙や年賀状を書くときに「法悦に近い歓びを覚えた」と随筆に書いている。義兄の住所が「京都市伏見区深草極楽町」だったからだ。

（写真は、岡山市中区中納言町の小橋駅〜中納言駅の街並み）

地名に底知れぬ感慨を覚える癖は、僕も子どもの頃から全然変わ

っていない。僕も塚本邦雄の言っていることに本能的に共感できる性質である。

僕の地元岡山市が昨年四月に政令指定都市に移行したとき、市の意向で「北区」「中区」「東区」「南区」という区名が採用された。と思いきや、市民自身が市との論争に疲れ果てたのか、最後には市民アンケートでもこれらの区名がトップに選ばれた。「旭川区」などの由緒ある地名は却下された。

今年も年賀状の季節がやってきたが、地元への封書や年賀状に住所を書く楽しみや、地元への郷愁・懐古の情というものが、だんだんと自分の中から無くなりつつある。

例えば、岡山南高校は北区にあり、古くからの西大寺地区は東区にあるなど、もうグジャグジャになってしまったわけで、「ああ、あの人が住む、岡山市北区の東の西の南よ・・・」などと感慨にふける他県民がいるだろうか。どうにも恥ずかしい思いがする。

二〇〇六年のノーベル文学賞受賞者のオルハン・パムクは、『イスタンブール』の中で、トルコ人の持つ憂愁・懐古・郷愁・ノスタルジーを意味する「ヒュズン」について書いている。「イスタンブール」や「ボスポラス海峡」という語には、トルコ人なりの哀愁の響きがある。少なくとも、そのようなヒュズンが、色んな事情があるにせよ、岡山市にもあって欲しかった。

仙台市や川崎市は偉いと思う。「泉区」「青葉区」「宮城野区」「太白区」「若林区」、そして「川崎区」「幸区」「中原区」「高津区」「宮前区」「多摩区」「麻生区」。川崎市の区名は、他の政令指定都市には

ない。

仙台市や川崎市は、ノスタルジーがどういふものか、地名が人間の文化にとつていかに重要なものか、まだ分かつていると思う。岡山市では、路面電車の駅名がまだ命綱で、「清輝橋」「柳川」「城下」「小橋」「中納言」「門田屋敷」「東山」などがある。

僕の場合、地元の名のように、自分以外の力によって自分の中から奪い取られていく哀愁・郷愁のようなものを保つのに、使っているものの一つが、やはり和歌なのだ。

和歌に多用される地名は「歌枕」と呼ばれる。京都「深草」は言うに及ばず、仙台市宮城野区の名となった「宮城野原」は、由緒ある歌枕だ。「青葉」「青葉山」という名は、元は京都にあり、和歌で「青葉」「青葉山」と言うと、多くが京都のそれを指すが、「青葉」が区名になっているのは横浜と仙台である。

深草の里の月かげさびしさもすみこしままの野への秋風（源通具）  
立ちよれば涼しかりけり水鳥の青葉の山の松の夕風（藤原光範）  
あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原（西行）

遠くの人を思うために地名があるわけではないけれども、地名が遠くの人への思いを引き出し、確認させてくれることがある。それが地名の力だと思う。

故郷の風景やあぜ道や路面電車や地名を見て「恋しい」、「寂しい」、「懐かしい」と思うことは、いわば一種の共感覚のはずだ。地名も、

ノスタルジーの重要要素であると僕は思う。それが無くなりつつあるような気がする。

私は、「ああ、ドコソコの地にあの人が住んでいるのだな」という感慨をなるべく感じておくにはどうすればよいかを、いつも考えている。例えば、最近では皮肉なことに、相手が若い知人・友人である場合、ただ味気ない住所を書いたり印刷したりした年賀状を出すことより、心を込めて長い電子メールを相手に送信するのほうが、僕は好きになってきている。メールだと、味気ない住所を書く手間を省くことができるし、相手のことを心から思い起こしながら本文の入力に集中できるからだ。

今後はもっと、「書きたい内容があるのに、書きたい住所がない」時代になっていくのではないだろうか。そうなれば、「形式的な年賀状」でも「軽い電子メール」でもなく、かえって「丁寧な心を込めた電子メール」こそ、日本語という言葉の美しさを味わい続けるための命綱であるという気がしてくるのだ。

だから、僕はここ数年は、疎遠になった知人や仕事関係者への形式的な挨拶のほうを年賀状のみにして、逆に、僕の中で特別に大切な人たちには、年賀状も出すものの、あえてその後に、年末年始を避け、時間をかけ心を込めて、長い電子メールを「手紙」として送ることもある。もちろん、頭語・結語、時候の挨拶などは手紙と同様の書き方をするところがあるし、全く手紙を書かないわけではない。

本当は、手書きで手紙を書く機会をもっと増やしたいとは常々思っている。日本人としての心遣いや礼儀作法をどうしても守りたい

という思いの果てがこの結果だというのは、何とも皮肉なことだとも思っているから。

しかし、それにしても、心を込めて読んでくれることが分かっている相手には、味気ない住所を綴る手間を通さずに、深い内容をメールで伝えることのほうが、よほど意味のある心温かい交流だという気がする今日この頃である。

#### ■画像出典

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Tramway\\_at\\_Okayama\\_city\\_.JPG](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Tramway_at_Okayama_city_.JPG)

## 第二部 マルクス

二〇一一年六月二十日 起筆、攔筆、公開

#### ■おすすめ著作

『資本論』 『共産党宣言』 『経済学批判』 『経済学批判要綱』  
『経済学・哲学草稿』

マルクスが人間の五感というものをどう見ていたかを、その著作だけから読みとることは難しい。しかし、『経済学・哲学草稿』における「人間の五感の形成は、現在に至るまでの全世界史の一つの労

作である」という言葉には、マルクスの五感観というべきものが隠されている。

まだ西洋でも生理学的意味での「共感覚」の研究は日の目を見ていなかった時代であるが、おそらくマルクスは、現在は「共感覚者」と呼ばれている、本当に五感が混交している「化石的人間」の存在は知っていたに違いない。

吉本隆明はこれについて、「触覚・味覚・嗅覚のような古層の感覚が退化し、視覚・聴覚のような表層の感覚が進化してきた、という過程が、マルクスの言葉から感じられる」という主旨を『初源の言葉』で述べているが、吉本の分析は、悪くはないと思うものの、どこか目的論的自然観への傾斜のにおいを感じさせる点が、私には不満である。どうして、「労作と言える理由は、ただ共感覚が分裂して五感の形成に至るまでに、長い年月がかかったからである」と言わなかったのかと、少しじれたい思いがする。

すなわち、吉本の言う「触覚・味覚・嗅覚のような古層の感覚」とは、私にとっては、近代西洋的自我発見後の人間の「視覚・聴覚のような表層の感覚」とほぼ同等に「表層」であるように思える。吉本が「アメーバのような感覚を身体反射として表出する段階」と呼ぶ、その「アメーバのような感覚」を、私はいわば「阿頼耶識の原帰属性である共感覚」と見ている。

このような観点から見ると、吉本よりもマルクスのほうが、生命体としてのヒトの感覚世界を的確に社会思想に取り入れたと思えるくもない。

それはともかく、マルクスの理想が最終的に失敗した理由は、私は二つあると思う。一つは、マルクスが人間の欲望を甘く見積もったということである。二つ目は、「マルクスが同時代に見た西洋文明の欲望は、分裂した五感が生起させた」ことに言及しなかったことである。前者については、マルクスの極度の優しさが邪魔をした。後者については、マルクス自身の生まれ持った強大な西洋文明の風土が邪魔をした。

社会が完全に持続可能な共産社会であるためには、社会の構成員の知覚が総じて基層感覚的・共感覚的でなければならぬことになり、マルクス自身が本能的に欲求している社会はそのような社会であると思えるのに、唯物史観の果てにある現実のマルキシズム社会では、分裂した五感が生起させる欲望を常に抑え続ける必要があった。マルキシズムは、マルクスの理想ともまた違っていたということなのだろう。

### 第三部 小室直樹

二〇一一年九月八日 起筆、搁筆、公開

#### ■おすすめ著作

『ソビエト帝国の崩壊』、『新戦争論』、『日本教の社会学』、『日本人の可能性』、『国民のための経済原論Ⅰ・Ⅱ』

『ソビエト帝国の崩壊』は、私が生まれる前に出た著作である。実際にソ連が崩壊したのは、私が九歳の時であった。それからさらに十年後に、本著を読むことになった。

ソ連崩壊が過去のものとなり、米国の一人勝ちとその後の同時多発テロ、中国の台頭ばかりが目立つ今となつては、内容が古いという評価も多い本著だが、私にとっては、本著は「ソ連崩壊を正しく予言した」稀有な努力家の書いた書物として心に残っている。

出版当時は、多くの日本国民にトンデモ本として受け止められた。しかし、私は「努力する天才の眼には、少なくとも十年先が見えている」と思う。本著が出ておよそ十年後に、ソ連は崩壊した。

ということとは、十年後のアメリカや中国、そして十年後の日本がどうなるか、見えている人には見えているのだろう。そして、その人は、今現在トンデモ学者と言われている人のうちの誰かなのかもしれない。

「心技体」という言葉がある。私は、アメリカは「体」から、中国は「技」から、そして日本は「心」から崩壊するであろうと感じている。しかし、この私のなげなしの知性による身勝手な予想は、小室直樹氏の網羅的で深遠な先見の明に比べれば、非常に偏狭なものだろう。

小室氏は、ソ連崩壊の十年前から、そのことを、「予言」した上に「断言」したように思う。この精密さは、機械的精密さというよりは、動物が人間よりも早く地震を察知して逃げるとき五感の精密

さのほうに似ていると、私には思える。

#### 第四部 私の思う「愛国心」や「愛郷心」について

二〇一一年九月八日 起筆、攔筆、公開



今回は、「愛国心」や「愛郷心」についての私見を書いてみようと思う。ここでは、「国家」や「出身地」という概念への愛というよりも、その「国家」や「出身地」を下から支えているその土地固有の動植物・農作物への感謝の念・観察眼・洞察力としての「愛国心」や「愛郷心」についての話である。

私の故郷岡山では、侵略的外来種であるヌートリア（ネズミ目ヌートリア科）の異常繁殖により、地元のいくつかの動植物が壊滅状

態に追い込まれており、自治体も毎年数千匹規模のヌートリアの殺処分を奔走している。

元々は、その毛皮を日本軍の軍服・防寒服に使うために欧米から輸入した動物であった。日本は欧米の動物の毛皮を身にとつて欧米と戦ったのだという現実を、忘れてはならないと思う。

私は、小学四年生のときに、学校の裏山でヌートリアを捕まえて、そのままわざと逃がしたことがある。最初は、つかまえてから自分の手でヌートリアの体を叩いてみようと思っていた。それは、ヌートリアによって壊滅状態に追い込まれつつあった岡山のベッコウトンボに対する愛情から出た、子どもなりの精一杯の仕返しのもつもりだった。

ところが、初めて見たヌートリアの目には、「動物の眼光の強さと温かさ」があった。私が子ども心に、「ヌートリア」と「ベッコウトンボ」の構図を、「欧米先進諸国」と「日本」の構図に重ねたらしいこと、そして、結局は「動物に罪はない」という判断を下して逃がしたのであることが、今になってようやく論理的に分かるばかりである。

そして、二十年が経った今、岡山県内のベッコウトンボはほぼ壊滅、あるいは全滅したと言われている。こうして、「ヌートリアを叩き殺さなかった私の優しさが、ベッコウトンボを死に追いやった」という言い方もできる結果となったのであった。「不条理だ」と、しみじみ思った。このような体験は、ずっと頭に残るものである。「日本らしい田んぼの畦道」の風景というものがあると私は思う。

ここでの「日本らしい」とは、「日本列島が大陸と分断されて以降に長い年月をかけて育ってきた、水草・雑草・生物の固有種が豊かな」という意味のはずだと思う。

ところが、戦後になって、日本人の生活のアメリカ化と全く同じ形で、日本の植物もアメリカ化した。例えば、国産畦菜（アゼナ）はアメリカアゼナに取って代わられていった。

私のような植物学の素人でも、東京の郊外の田んぼなどを電車の窓からぼんやりと眺めていると、アメリカの田園風景かと冷や汗を掻くことがある。私には、いわゆる五感が混ざり合う心理学上の「共感覚」があるので、今の一般日本人よりも異常に敏感すぎるのだろうかとも、一時期は考えた。

確かに私は、小さい頃はネズミのしっぽをつかまえて遊ぶような少年であったし、おそらく「通常ではない」敏感さを持って自然や動植物を知覚・観察しているとは感じている。

ただし、物事の見方には微視的な見方と巨視的な見方があるとすると、小さなアゼナが国産か外来かなどということを見分けるには、どんな「敏感人間」であっても、数メートルく数十センチまで近づいて微視的に葉の形を観察しなければならぬはずだと思える。

ところが、そう思いきや不思議なことに、素人の私の目で、半ば怠けながら数十メートル離れた位置から見ても、「日本の懐かしい田んぼの畦道」の趣が感じられない場所が東京にもある。そこで、近づいてみると、本当にその周辺がほぼ全て外来種の植物であることがある。

今回の大震災被災地域のうち、宮城県は、全国で真っ先にベッコウトンボが絶滅した土地であったようだ。宮城県の田んぼはあまり見たことがないし、宮城県についてはほぼ仙台の中心部しか知らない私だが、それでも、今回の震災で流された東部の田畑の水草の中にも、欧米産のものが大量にあっただろう。

アメリカ両大陸に起源を持つ水草は、今や岡山の田んぼにも青々と、いや、ブルーブルーと輝いている。岡山県民の方がここをご覧になっていたら、悲しまれるかもしれないが、私の愛郷心は昔よりもずっと薄れてしまった。

今回の台風十二号で、岡山県玉野市の全域が避難勧告となったが、私の「ヌートリア体験」や「アメリカアゼナ体験」は、「現在の故郷（現在の日本）を愛する」という心を、少なからず冷めたものになっている。

玉野市が雨に流されたと聞いても、アメリカアゼナが流された光景ばかりが脳裏に浮かんでくる。存在しないものは雨に打たれないのだから、壊滅したベッコウトンボが雨に打たれるはずもなく、雨に打たれたのはヌートリアである。

「今回の震災で流されたのは、本当に日本であるか」、「今回の台風が通り過ぎたのは、本当に私の故郷であるか」といった、私自身が生み出したかなり意地悪な問いが、私の「愛国心」や「愛郷心」を邪魔しているようである。これは、私だけに当てはまる、あくまで個人的な思想の問題なのだろうか。それとも、日本社会全体で考えてみる意義のある課題なのだろうか。

人間は不条理な生き物で、自分が愛するものの消滅しか深く悲しむことができないようである。

「全人類の命が大切だ」と頭では思っているが、我々日本人は、毎日毎日世界中で餓死している子どもたちを思って涙するわけではない。けれども、身近な人の死には簡単に涙する。それと同じで、「今回の自然災害で壊滅したのは、紛れもなく日本である、我が故郷である」ということが言えなければ、私は残念ながら、深く悲しむことができないようである。

私は一人の日本人男性として、自分のこの心情に一種の皮肉と同じ情を覚える。この心情は、かつて三島由紀夫が、「もし先の戦争に勝っていたとしても、日本刀で戦ったのではなく、欧米の技術で戦ったのだから、日本が勝ったとは言えない」という主張をしたことに似ていると感じる。

私は、三島由紀夫の最期の血を流した行動の是非の議論はともかくとしても、その「日本観」や「日本感覚」は本質を突いていると今でも思っている。三島由紀夫のように、「愛国心」や「愛郷心」を軍事技術に喩えて主張すると、色々と異論もあるだろうが、同じことを動植物や我々人間の身体について言えば、いかに「日本の風土」という概念が崩れかけているかがよく分かると私は思う。

我が国は、自分たちで食べるものの多くを自分たちの手や自分たちの土地で生産していない国である。「和食」と「洋食」の違いは、加工後のスタイルの違いであって、原材料から見れば、多くは「洋食」化している。「ほとんどのものは自分たちの田んぼや畑で作るが、

どうしても足りないものだけ輸入する」という意識が、我々から失われつつあるようである。醤油の味も、だんだんと懐かしい味がしなくなってきた。

我々の身体の大部分は、外国人の労働のおかげで外国の農場においてでき上がったものを食べることによって、その外国産の食べ物の粒子で構成されている。これによって、日本人の死因のトップは全て欧米式疾患に入れ替わった（癌・脳卒中・心疾患など）。

主に日本産の農作物を原材料とする和食を食べ続けたことによる、戦前までの死因のトップは、肺炎・気管支炎・全結核・胃腸炎・老衰などであった。この頃にはすでに癌・脳卒中・心疾患の存在が知られていたにもかかわらず、それよりも上位に肺炎・老衰などが位置していたという意味であり、老衰の分類の中に癌などがあるのではない。

「有機体である生物が、その生物が生まれた土地以外の土地で生まれた有機物を短期間に大量摂取すると、拒否反応が出る」という現実への危機感を、我々はもつと持つべきではないだろうか。日本人という有機体が、たったの数十年で他の土地の有機体である動植物を胃に入れるようになった事実を、もつと真剣に見直した方がよいのではないだろうか。

特に日本は、海で他の土地と隔てられているために、多くの野生動物や野菜などの農作物の固有性が、ユーラシア大陸やアメリカ大陸と比べて歴然としている。この数千年に渡る異質性を、我々日本人の身体・内臓がたった数十年で埋め尽くせるとは思えない。

もつとも、私とて、このような主張をしていながら、その体の大部分は外国産の食べ物で出来ていると思われる。私は、自分にできる範囲で、なるべく自分の考えに合うような食生活をしているつもりではあるが、それでも限界というものがあるのは仕方ない。

「懐かしい日本製の田んぼの畦道」という心象風景を脳裏から薄れさせることに長けていない性質、自然の変化に敏感な性質の日本人であればあるほど、かえって今の日本を心から愛すること、大震災や台風被害を心から悲しむことは難しいかもしれない、私にはそう感じられる。個人の問題ではなく、日本人全体の問題なのだろうと思う。

いつかまた次回の大震災・大津波が襲ってきて、家も田畑も流されたとき、「ああ、今回流されたのは、確かに懐かしい日本の風景であった。今回ばかりは、悲しみもひとしおである」と我々が心から言えるように、これからの日本の文化・政治・経済を構築していかなければならないのではないだろうか。

結局、今回の記事も、最近書いてきた各記事と根を同じくしていると思う。つまり、何度か書いたように、「虚無的殺風景」の直前までは美しく目に見え続ける「花」や「もみぢ」を今から作ろうということだと思う。「次回の津波や台風には、本物の日本製の田んぼを触らせてやるのではないか」という気持ちで生きようということだと思う。

#### ■画像出典

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Lindernia\\_procumbens.JPG](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Lindernia_procumbens.JPG)

### 第三編 三十歳〜三十九歳

#### 第一部 一介の事務担当者が思うこと

##### ・皇太子殿下への書簡、新元号への対応・

二〇一八年十一月二十三日 起筆

二〇一八年十一月二十四日 攔筆、公開

私はこれまで、現皇太子殿下への書簡の代筆を人から（主に上司から）何度か依頼されたことがある。今からおよそ半年後にその皇太子殿下が新天皇として即位されることは、個人的にも感慨深く受け止められることであると共に、甚だ慶賀に堪えないことである。同時に、現天皇陛下が退位され、平成の世が終わること自体には、寂しさも覚える。

かつて三島由紀夫は、「昭和天皇から時計をもらった」などと自慢していたが、私のほうは、皇太子殿下から何も賜ったわけでもなく、代理人として事務的かつ一方的に書簡を送付させていただいたままである。



しかし、皇室と何となく精神的・物理的につながっているという感覚は、一介の日本人個人の人生においても非常に価値の高い感覚として感じられるもので、書簡といった具体的なつながりがなくとも、本来は国民の一人一人が持つていて差し支えない（不敬ではない）感覚であると思う。

ところで、私に書簡の代筆依頼をお寄せになった方々は、「自分は字が汚いから、ワープロで打ってくれ。その代わりに、俺が書いて、ワープロを打ったことにしてくれ」、「面倒くさいから、お前が書いて、タイプライターで打て」といった理由で、私に依頼をお寄せになったのである。

まず、パソコンと言うべきところをワープロやタイプライターと言う時点で、どの年齢層の依頼者か分かるものだが、それはそれとしても、理由そのものが皇太子殿下への不敬の嵐である。

皇太子殿下のもとに届く全国からの書簡のうちの何割が、「毛筆である」、「一定以上の上質の和紙に書いている」、「自筆である」、「書簡の内容も自作である」、「敬意が感じられる」の全てを満たしているかは分からないが、これら全てを満たしていない書簡を私は書かされる羽目になったわけである。つまり、パソコンで、ペラッペラのA4用紙に、味気ない明朝体文字で、代理で、面倒くさがっている人の気持ちを入りする羽目になったわけである。私がうまく調整できる要素と言えば、最後の要素のみである。当然私は、少なくとも崇敬の念だけは込めて作成、入力することにした。

皇太子殿下からの書簡に返信する際は、「朶雲を拝受いたし、恐悦

至極であります」という表現を用いた。この「朶雲」とは、位の高い人からの手紙という意味であり、「朶」は多数の枝をいう。「万朶の桜」と言えば、枝もたわわに満開である桜のことで、軍歌「歩兵の本領」にも登場する。

また、昨今は相当な高齢者であっても、「行幸」、「行啓」、「行幸啓」、「巡幸」、「巡啓」、「巡幸啓」の区別がつかない人が多い。上司の知識にも危ういものを感じたが、書簡で私は、上司が分かっている風を装い、区別して書いておいた。

しかし、上司の命令通り、これをパソコンで入力し、その辺の店で買ってきたA4用紙に印刷し、安い茶封筒に入れて、皇太子殿下に送りつけたわけである。それでよいのかという進言は、私は当然、事前に行った。その書簡の外見が象徴する依頼者の無礼極まりない態度と、書簡の内容に込められた私の崇敬の念とが、全く相反していて、ほとんど笑いの話の次元である。

ところで私は、「平成」の次の新元号が少なくとも改元の一年以上前に分かなければ進めようがない仕事に、日々携わっている。改元にあたり、公文書および官公庁への提出書類に記載する年月日を西暦としてよい方針に移行するらしき情報や兆候が、官公庁の動きに見受けられるが、今のところその旨の通達はない。

一方で、「和暦（元号）でなければならぬ」旨の定めは、法令には存在しないにもかかわらず、既に各省庁や全国の法人の内規において、しかも様々な書類について存在する。そのため、二〇一九年四月・五月以降に必要な膨大な書類の草稿も、今から作成する

とすれば、当然「平成三十五年三月三十一日」や「平成二百年」などと、架空の年月日を記載しなければならぬ。「平成三十年十〇年」といった記法は、私に関わる多くの書類で禁止されているため、致し方ないことである。

従って、新元号が判明する二〇一九年三月三十一日までは、実務の無駄（のちに行うことになる書類の訂正作業）を省くため、あえて書類の作成を見送り、いわば放置状態にしておくのが得策だということになる。そういうわけで、これまでは事前に可能であった書類の作成が、悉く後ろ倒しになっている状況である。

無論、二〇一九年四月一日（現時点で政府が予定している新元号の公表日）に新元号が分かった瞬間から、膨大な仕事量に追われることになる。とりわけ、五月一日の改元までが多忙となるだろうが、それ以降に必要な書類についても、本来ならば前年度に準備できていれば済むものを、後ろ倒しして作成し始めるわけで、繁忙期は数ヶ月に亘るだろうとの予想がつく。

だからといって私は、日本の公文書の年月日の記載ルールを直ちに西暦に移行し、和暦を廃止してほしい、あるいは、和暦の使用をカレンダーや伝統文化事業に限定してほしいなど思っているのではない。元号はまさしく日本の伝統文化であり、文化は仕事の便宜のために崩してよいものではないと考えるからである。そうではなく、新元号を一年ほど前に発表し、広く国民に知らしめてほしいのである。あるいは、今上陛下のご退位や崩御の前に新元号を発表したくないのであれば、せめて「平成三十年十〇年」といった記法を

許可する通達を出してもらわなければ困る。

しばしば、新元号を現天皇の在位中や生存中に発表するのは不敬だと主張する人がいるが、それは、欧米列強の君主観の影響下で定められた一世一元の制のもとにある明治以降の近現代の天皇だけが天皇だと考えている証拠で、そのほうが全く不敬であって、非日本的である。自然災害が起きるなど、国民が苦しんだ際に、「自分が生きていくうちに元号を変えよ」と命じ、改元を実現した天皇はおびただしい数に上るが、「自分が生きていくうちに元号を変えるな」と仰せられた天皇は、現天皇陛下も含め、存在しない。

新元号の早期における周知が、国民一人一人の仕事や円滑に推進させ、巡り巡って次期の君が代（天皇の時代、御代、御世）を繁栄させることになるだろう。

ところで、新天皇のご即位および改元を祝うにあたり、私が半ば主宰の一人として参加していた伝統和歌の会「余情会（よせいかい）」を一時的に復活させ、「新天皇（即位および改元の奉祝和歌会（仮題）なるネット歌会を開催する案が、今年の五月末頃に私の頭に浮かんできた。

しかし、実現は今のところ難しいと考えている。実現するとしても、余情会のメンバーは既に全国に散らばっていることもあり、会のメンバー以外の歌人の方々も含めたネット歌会とすることになるだろう。いや、改元の次期はあまりに多忙であるので、十中八九実現しない（させない）だろう。

と、これを書いている今、「かぐや姫の物語」の天女の歌（作曲…

高畑勲）が遠くから聞こえてきて驚いた。というのも、余情会の女性の皆様は、旧華族家や巫女（社家）の方々が多く、元々いわゆる許嫁（いいなずけ）のお相手のいらっしゃる方々が多いのである。いくら私と和歌のやり取りをしても、いずれはそれができなくなるお立場で、そのご婚姻ラッシュの時期が、ちょうど六・七年ほど前から始まり、男性歌人としては複雑な気持ちになっていたところである。

六月七日の夜には、これらの巫女さんたちが夢にまで出てきた。そこに「かぐや姫」の音楽とは、皮肉なものである。

六月九日には、思い出に浸りつつも気分転換する目的もあって、東京都庭園美術館で開催された「建物公開 旧朝香宮邸物語」を訪れた。朝香宮家など旧宮家にゆかりのあった歌道家の子女の方々も、今では旧宮家・華族家のみならず一般の会社員に嫁ぐなどされている上、実家である本家・分家の多くで女子しか生まれていないため、冷泉家のような歌道家の体を成さなくなった家が増えている。

かの冷泉家でさえ、二代続けて女子しか生まれておらず、当主の男性は藤原定家の血統を継いでいるわけではない。しかしながら、事実上、最後の旧派歌道家である冷泉家には、もはや血統に関係なく、末永く続いてほしいと願ってしまう。

## 第二部 「令和」時代を控え、早速「令和一七〇年」、続いて「令

和一六〇〇年」が登場

二〇一九年四月十四日 起筆、攔筆、公開  
二〇一九年四月二十日 追記（文中の追記部分）

四月一日、「平成」の次の新元号が「令和」と発表された。私個人としては、かなり出来の良い、優れた元号だと思う。「出来の良い」というのは、後述の通り、離れた文字どうしの組み合わせが上手であるという、純粹に国語学的、漢文学的な意味である。何も、天皇皇后両陛下や皇族への現政府の態度や、元号の選定の仕方、ましてや国政の出来が良いという意味ではない。

早速、手元の様々な日本語入力システムでも、辞書がアップデートされ、「れいわ」と入力すれば一発で「令和」に変換できるようになっており、いよいよ「令和」時代が来るのだと実感させられる。と思ったところ、MS・IMEの場合、実際には以前から「令和」が人名として標準統合辞書に登録されていたようだ。私はAIOKも頻繁に使うが、こちらも現在（おそらくは四月一日のうちに）、一発変換できるようになっている。

一方で、私個人の新元号関連業務という点で見ると、昨年十一月にも書いた理由により、四月一日以降、極めて忙しい日々を過ごしており、気分はやや暗い。今これを書いているのは、時間があるからではなく、愚痴を言う気分転換の時間をあえて作っているからである。

さて、マスコミは、早速「令和」の考案者を詮索していて、実名

報道も行っているが、政府発表では、考案者本人は非公表を希望しているとのことであるので、私は詮索の価値はないと思う。

「令和」の出典は次の通り。

『万葉集』巻五

梅花の歌三十二首、并せて序

初春令月、氣淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。

初春の令月にして、氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。

初の国書由来の元号である旨を政府が発表した中、この万葉の序自体が漢籍からの影響を受けていると指摘する声も出ている。特に、内容は張衡による詩「帰田賦」(『文選』)、形式は王羲之による『蘭亭序』からの影響が指摘されている。無論、漢籍から直接採ってきたのではなく、直接参照したのが万葉である限り、国書由来と言って差し支えないだろう。

「令月」は、「れいげつ」と読む場合と「よきつき」と読む場合とがあるが、いずれにしても同じく「美しい月」の意味である。つまり、「令」は「月」の修飾語として登場するわけであるが、新元号では、おそらく「令(よ)く和(やはら・な)ぐ」、「令(よ)く和する」というように、副詞的な機能に置いた。

私は、原文については、「初春の令月(れいげつ)にして」ではなく、「初春の令(よ)き月(に)」としたほうがよいと考えるもので

あるし、実際にそう読み下している学者も少なくないが、政府発表では「初春の令月にして」であった。

従って、政府に新元号を提案した(直接的に言えば、出典の読みを首相や官房長官に指南した)者、つまり、おそらくは考案者の人物が、「令(よ)き月」派ではなく、「令月(れいげつ)」派の人物であることを意味している。だから、「令和」の考案者が、「令月」を「令(よ)き月」と読み下して解説した過去のある、現時点でマスコミにより第一候補と目される人物かどうかは、結局のところ分からない。無論、あえて自説が分からないように、自説とは異なる読みを指南した可能性もある。

そうなると、私のような和歌愛好家は、このような愛好家なりの解釈法とルートで、「令和」の考案者ばかりか、関係者まで思い浮かぶ(純粋に国語学上の学閥争いを観察した結果として、脳内で自動的に学閥や関係者が絞られる)わけだが、それは万葉をはじめとする和歌への私自身の立ち位置や解釈や敬意が自然と自分自身に対して醸し出す(仄めかす、教えてくれる)性質の予感である。

和歌愛好家なら、考案者を思い付いても、あるいは、その予感される考案者と自分とで万葉解釈が異なっても、既に元号は決定したのであり、しかも考案者本人が秘匿を希望しているのであるから、とりあえずはそつとしておくべき事案であると言えるだろう。

いずれにせよ、万葉の内容を全然見ないで予測相手の自宅に突進してインタビューするマスコミの、いわば「考案者詮索・報道システム」は、この「自然と醸し出される(仄めかされる)予感」とは

全く違う原理で動くものなのだろう。

また、この「令和」について、主に左派勢力を中心に、「現政権が国民に（あるいは人から人へ）命令して和を成さしめる（国家・国民を安定させる）」という意味を国民に分からないように入れてあり、現在の日本の右傾化を象徴する元号だ」という旨の意見が多数見られる。

社民党や共産党、そして立憲民主党や国民民主党の党内左派勢力がこのような主張をしていることは言うまでもない。しかし、普段、表立っては右にも左にも寄っていないように振る舞っている学者や有名大学の教授ら（あくまでも一部だが）が、今回このような立場をとっているのが興味深い。

とりわけ東京大学史料編纂所の本郷和人教授は、テレビに出演し、『令』は上から下に何か『命令』する時に使う字で、「国民一人ひとりが自発的に活躍する」という（現政府の）説明の趣旨とは異なっており、『令和』には『人に命令して仲良くさせる』『使役』の意図が入っていると説き、六つの新元号案のうち、実に「令和」以外の五案全てを擁護した一方、「令和」のみをあらさまに批判した。但し、最近、本郷教授をはじめ、東大の少なくとも歴史学者らにその気（け）、つまり左派への傾きが見られるので、特に驚きはしないが。

しかし、たとえそうであろうと（「令和」にその意がややあろうと）、そうであるまいと、純粹に万葉の見地からこの「令和」の語が成る（生成される）かどうかを観察して、確かに美しい語形・語意をも

って成ると判断するに至る、私を含む万葉愛好家たちにとっては、この「令和」によって自分が右傾化も左傾化もしないのである。「令和」を右だと主張する場合も、左だと主張する場合も、万葉そのものを離脱した視点である点で、同じ穴の貉になってしまうのではないかと、私は考えるまでである。

このほか、「ラ行音が語頭に立つのは日本語らしくないから、新元号も日本のものという感じがしない」という批判も見受けられるが、これについても、私は「ラ行音が語頭に立つ」と問題ないと思う。正しくは、「大和言葉ではラ行音が語頭に立ちにくいいため、漢字の音訓のうち、訓ではラ行音が語頭に立ちにくいことになるが、音はこの限りでない」と言うべきである。元号でラ行音が語頭に立った例には、奈良時代の「靈龜」と持明院統（北朝）の「曆応」がある。これらの読みは、当然、訓ではない。

ところで、前にも書いたように、公文書は慣例上、和暦表記であるから、かえって「平成二〇〇年」のような、天皇陛下を小馬鹿にした（一神教における永遠の命を保証された唯一絶対の神と同一視した）不敬表現が大々的に登場するわけであるが、「平成」から「令和」への書き換えにあたり、相変わらず「令和一七〇年」、「令和三五〇年」、「令和七二八年」などの無茶苦茶な表記が乱発されていて、私は失笑した。

ちなみに、これらの表記はどういう時に登場するのかというと、例えば、活動実態が怪しいか、それがほとんどない政府系の幽霊特殊法人や幽霊公益法人が溜め込んでいる内部留保や資産（その一部

は公金、税金)をいつまでに吐き出すかについての目標年限を定める際に、登場するのである。

つまり、放置してある税金(ということ)は、国民から取る必要がなかった税金)を数百年後までに公共事業や公益事業に無駄なく使うという宣言を、あり得ない和暦で行っているのである。要するに、溜め込んだ税金をこれらの事業に使う気が最初からないということであり、その気がないからこそ、存在不可能な和暦を平気で使うわけである。

天皇制否定論者のほとんどは、もちろんん天皇はタダの人間であると考えられるだろうが、天皇は神であると考ええる保守論者の場合でも、天皇は一神教の唯一神とは違うのだから、やはりホモ・サピエンスの域を出ない現人神にとどまる(ヒトという有機体・生命体として、せいぜい百年弱で死す)ものと認めて暦や度量衡を設計する姿勢こそが、天皇存在に対する本当の崇敬であって、「平成(令和)数百年」などという表記は、これを真つ向から否定して元号を西洋化する表現であるというのが、私の考えである。

以前から不思議に思っているが、Twitterでこのような表現を擁護したり批判したりするどころか、このような表現がある事実さえ話題にならないのはなぜだろうか。もしかしたら、私の普段の業務内容が、意外に特殊であるのかもしれない。

これまでに私が見た、公文書上における最上級(最長年数)の、(その天皇陛下に対するあまりの傍若無人ぶりから)違和感や不信感を通り越して抱腹絶倒を避けられない不敬表現は、「平成二五〇〇年」

だが、これが「令和二四七〇年」に書き換えられたかどうかは確認していない。目にするのが楽しみである。

(以下、二〇一九年四月二十日に追記…四月十九日に、少なくとも「令和一六〇〇年」の表記までは存在することを確認した。追記終わり。)

そういえば、前にも書いた「新天皇ご即位および改元の奉祝和歌会」の開催案であるが、「令和万葉歌会」として開催することとなった。

### 第三部 現皇統以外の勢力の裏話・出雲神道と創価学会・

二〇一九年十月二十二日 起筆、攔筆、公開

本日、令和の即位礼正殿の儀が執り行われた。

ところで、大日本皇道立教会の衰退以後もしばらく利害が一致していた出雲神道(千家尊福ら出雲大社派)と創価学会(代々の会長と幹部)は、「南朝正統、現皇統(北朝系)傍流」論(一部の急進派は現皇統打倒・国体転覆論)を掲げて共に活動し、それを(もはやヤマト王権・現皇統に対抗して新王朝を建てる必要性を感じていない)吉備神道などが傍観する形だった。

平成の即位礼正殿の儀の時に、吉備(特に古代吉備王国に起源を持つと思われる女系巫女神道)が単独で、皮肉を込めて、ヤマト・

出雲・吉備融和及び南北朝融和の秘儀を各家で私的に行つたのは、吉備人の私から見て間違いないのだが（秘儀の記録の一部は将来、私にも預けられる予定）、おそらく出雲も、創価学会が急速に新宗教化したため、この時点で学会から離れて単独の秘儀を行つたと思う。そして、二〇一四年の皇族と千家家の姻戚関係の成立（ヤマト・出雲の融和）により、出雲神道が創価学会と組む意味・利点が決定的に無くなり、傍観が得意な吉備神道と同様の今の立場に収まつたようだ。つまり、出雲神道と創価学会の縁は切れているはずだ（と思いたい）。

現在、学会を最大の支持母体（ほぼ結党主体）とする公明党は日本国の政権を担う。そのまま今日を迎えたというわけだ。独自の神話を持つ出雲とさえ男女の縁でもって仲直りしたヤマトの大王（天皇）血統を、「自公」政権・安倍首相が見上げたという構図が、吉備岡山出身の私としても興味深い。

出雲神道が心底から親ヤマトの立場を決心した背景には、日蓮主義系新宗教による「折伏大行進」などの国体・国民改造（ひいては国立戒壇建立）の強行、つまり一見宗教色の強化に見える事実上の政治色の強化への抵抗があつたと思う。

結局、自公政権下の国土交通大臣（要するに宗教的には地上の仏国土造成者の立場）のほとんどを公明党員が担っており、無論これは偶然ではないが、吉備出身の（新）宗教ウォッチャーである私としては、南朝正統論を簡単にやめて北朝系天皇を仰ぐ政権に入った集団の本性よりは、出雲・吉備神道が苦悩しながらも現皇統に寄せ

る崇敬のほうに首肯する。熊沢天皇でさえ、まだかわいいほうだった。

今となつては、皇統の変更などという大それた非現実を策謀するよりは、現皇室に有り難みを感じつつ、おとなしく宗教研究を楽しむのが良いというのが私の意見である。